

まどい

第190号

秋田県羽後町仙道中学校昭和30年卒

1955（昭和30年）創刊

2008年4月20日発行

186-0003 東京都国立市富士見台 3-6-404
tel/fax 042-574-8694 ・直 090-2332-4408

まどい編集室

<http://www32.ocn.ne.jp/~madoi/>
mal: madoi30s@cc.mbn.or.jp

秋には

古稀のお祝いです

古稀などまだ先のことと思っていまませんか。私達も数え年で七十になりました。このたび地元では「古稀祝いの会」をこの秋にと進めています。同期会最後とは言いませんが佐藤宗夫さんの事務局長はじめ地元実行委員は、全国からみなさんの参加を期待しています。

大まかな日程は次の通りです。

期日 平成二十年九月十九・二十日
会場 五輪坂温泉『としとらんど』
会費 一五〇〇〇円

詳細案内状は六月末に発送、八月二十日までに出欠をまとめる。

この冬の大雪は例年になく早くからそして大量に降りました。特に積雪の多い仙道はまだ雪の中です。そんな正月も終わりの頃一月三十二日「だるま温泉」では新年会が行われ十一名が集まりました。古稀の話はそこから始まり、四月二日には改めて「古稀祝いの会」開催の段取りが話し合われました。

時期的には秋の繁忙期の前を選びまし

た。また会場については、ご遠方の皆さんにはいろいろご不便やご迷惑をおかけすることも話し合いましたが、同期生皆さんにご案内する集まりとしては、まずは、最後の節目の会でもありますので故郷での開催とさせていただきます。うということを決まりました。「としとらんど」は「還暦祝い」のわりに二次会の会場となったところでもあります。

私達も数え年ではもう七十です。かつて私達のおじいさんやおばさんを出すとき、今は自分たちがとても信じられない思いもしますがこれも現実です。孫達から見ると同じなのかも知れません。

そろそろあちこちの故障が目立ってきています。本人があるいは家族が。それでもこの機会を逃すことなくみなさんそれぞれおさそいあわせてより沢山のみなさんが駆けつけて頂くことを願っています。

す。
なお当日の行程については、足の問題などを含めて検討を重ねて六月末には正式にみなさんへご案内をさせて頂くことになっていきます。



五輪坂温泉 としとらんど

カラオケ

佐藤芳雄

最近ではすっかりとお酒が飲めなくなってしまう。少し飲んだだけで呼吸困難になってしまうからだ。

カラオケといえば、飲み屋さんや定番。最初にカラオケをやったのは1970年も半ばでした。会社でボラスなどが出たおりに同僚に連れられて行ったのがはじまりだ。蒲田の繁華街のとあるスナックでした。黒い表紙の歌詞本があり頼むとテープをかけてくれるその歌詞本を持ってマイクまで行って歌う、歌いやすいようにメロディがリードしてくれる。当時はカラオケが始まってまもなくのこと、人気もありなかなか番が回ってこないと言う状況だった。

カラオケは始まったのも70年代BGM用8トラックのテープが入った「ジュークボックス」にマイクを取り付けて歌わせたのが始まりと言う。素人にも音楽に合わせて歌えるといううまいことを考えたものだ。最近では低調気味にあると言われるながらもカラオケボックスだけでも2620億円の売り上げがあると知られる。



る。

70年も後半、大森にあるアサヒビールの屋上では「ピアガーデン」があり、タマタマ数人が出かけた。そこでもカラオケがあったアトラクションで女性歌手が歌っていた。その歌手がデュエットしてくれるという、何という歌手かは覚えていないが申し込んだら当ってしまった。広い屋上は薄暗いがエライ込みようでした。歌ったのは「赤いガラス」街中に響くようなその音量、飲んでい

る人は聞いているわけでもないが歌い終わるとばらばらと拍手があった。ボクはステージで歌ったような気分になり大満足した。それから夢中になると思うだろうが実はそうでもなく今ある。歌い出したら止まらないうが数曲でネタが切れてしまふ、それは今も同じだ。

インターネットのあるウェブサイトで「カラオケラブ」を作り時々集まっては歌ったりおしゃべりしたり時間を儲けている。良く聞く「オフ会」という奴。これがめっぽう楽しい。そこでもボクは余り歌われない。正直に言えばボクの歌

える歌はもはや古典的なものになってしまったものばかり。早く言えば自分の青春に横切った歌と言うことだ。そのためどちらかというと、夢中になることもない。しかしカラオケは一部健康のために悪くないと思うようになった。喘息もちでヘビースモーカーなボクは当然呼吸が弱い、チョットした坂道でも息を切らしているし階段などは最悪だ。ところがカラオケでがんが歌ったあとにはのすごく呼吸が楽なのだ少しぐらいの階段などスイスイ。確かに効き目

がある。そう納得しながら一服するあたりは死んでも直らないだろうが。

最初の大勢の前で歌った時も恥ずかしかったりあがったりはなかったのに、最近では数人のカラオケでもあがったり恥ずかしかったりする。それは自分の思うように歌えなくなっているからだろう。声は出ないし伸びもないさらに続かない。テレビで歌謡番組を見ることがないので新しい歌は知らないし覚えられない。出始めの頃はテープだった。前にも書いたがメロディが誘うように歌い安かったが、今はテレビ画面に絵もありオマケに歌詞が出てメロディの沿って色が変わっていく、ボクのような素人には音よりもテロップの色変わりについていくしかない。そのため新しい歌に挑戦することが出来ない。ま、早く言えばリズム音痴に音痴と言ふことなのだろうが、そのくせ朗々と歌ってみたくもない。思っているんだからどうしようもない。

お世辞でも褒められると嬉しいのだから、やっぱりカラオケが好きなんだらうな。機会があればこれからも歌うことだろう。こけの生えたような歌を。

我が家の小さな家庭菜園は、昨年このほか成績が良く春から秋にかけて随分収穫があった。

春のエンドウ、ほうれん草、夏のナス、トマト、エダマメ等、秋の落花生、イモ、レタス、白菜、キャベツ、そして大根などであった。中でも大根の出来が良く、近所の家も頂いてもらいたいとたらい回しと言うことであった。仕方なく切干大根にして保存。それでも結局は畑に数本取り残された。

そして今年、種をまいた、ほうれん草が芽を出してきた。毎朝水をやりに行くが、昨年取り残した大根が腰の高さぐらいに大きくなっていて、そこに真っ白なそれは美しい可憐な花をつけていた。

いつかテレビで「大根の花」というドラマをやっていたが意味がわからなかった。だが実際にこの真っ白な花を見ると何となく解る様な気がした。

数本の中の一本を切り取って家に持ち帰り花瓶に立てた。大失敗でした。翌朝見るとぐったりと頭を下げていた。

こういうものは、野に咲いてこそ美しいんだ、自然でなければ……そう思った。あまりに可憐なので写真に撮った。

すでにソラマメ、エンドウは花をつけている。タマネギもそろそろ収穫だ。ナス、トマト、キュウリの畝ももう出来た。今月中旬には苗を仕入れて植えよう。

ジイちゃん忙しくなるぞ！

内藤清志句集「夜半の月」

この本は故内藤清志さんの「句集」です。奥様英子さんに病院での俳句ノートをお預かりしてから、早七年の歳月が過ぎてしまいました。ここにきてようやくまとめることが出来ました。少しずつ製本に取りかかっているところです。

以前平成元年に小冊子で数部作成しましたが、それに加えて後半不自由な目と手で何度も書き直ししながら纏った彼の俳句をすべて書き込んでいます。

清志さんの生涯は、これこそ三隻の船をこぐごとく、と表現していますが、一つは修行時代の一七年間。そして独立して最も充実した時代の一四年間。もう一つは闘病生活の七年間。

句集と共に追悼編としてまとめられた清志さんの人生は自分の人生設計に沿って確実に歩んで来たものでした。そんな中で病に倒れたことは誰にとっても計算外のことでした。しかしそれまでの清志さんの働きは奥様や子供達に確実に受け継がれ長い闘病生活にもくじけることなく立派に継承しています。

この本に書かれていることは、「まどい」を通してそこに居る姿が書かれています。忙しいときも病に倒れてもそれだけ「まどい」に関わってきたことが伺えます。

五月二〇日はかれ清志さんの命日に当たります。それまでには必要部数を完成させたいと思っています。

読んでみたいと思われる方がおりましたら、あらかじめご連絡を頂ければ配布させて頂きます。

A5版96ページ

編集室

大根の花 高橋孝之助



平成の老人狩り

今年私達も古稀のお祝いをやるという。つまり70歳になるわけだ。

4月から実施され悪評の「後期高齢者医療制度」の対象になるまでにはまだ少しある。それにしても何も75歳以上を別枠にしないでいいものなのだが、昔では「うば捨て制度」ともいい「平成の老人狩り」とも言っている。どうやらこれを考えたのはやっぱり役所、「厚生労働省の社会保険審議会」と言うところ。ここでは「七十五歳以上を一律に、病気がちで、認知症が多く、いずれは死を迎える」などと定義づけました「だから「後期」となったのでしよう。後期とは何かと言われて「長寿」と呼べて。全くの禁止。

今ひとつ怖い中身。「包括点数」外来診療を受けたとき、どんな診療を受けても6千円分しか医療費が出ないと言う。それ以上の診療をしても医者はお金にならないから当然十分な医療行為が出来なくなるし患者は受けられなくなる。救急患者のタライ廻しに等しい扱いになりそう。この制度は、七十五歳以上の全員

から高い保険料を徴収する一方で、高齢者に医療費がかかり過ぎるとして七十五歳以上の医療費を抑制する仕組みになっているのに「長生きを祝う」という言葉の「長寿」とはどうも頂けない。

学校で「ゆりかごから墓場まで」という言葉を聞いたのをまだ覚えて

いる。人の暮らしは、寝るところがあつて食べられて、働きながら少しは楽しむことが出来ればいい。それ以上のお金は税金に回してもいいと思う。ただし「ゆりかごから墓場まで」その税金がまもってくれればのことだ。

人生に必要なお金は、そんなに「差」があると思えないが方や一日1万円方や十万円。あるいは百万円。ことのすべてがそこから始まっている。

ささやかな年金で生きている大半の人たちには病んだらおしまい不安に駆られている。若い先長くはないと寂しく思っているところへ「おまえはもう後期だよおしまいだよ」と言っているようなものだ。

社会保障審議会には75歳以上の方が居るだろうか、いや居たとしてもその方は病人でも高度な医療を受け

られる様な人に違くない。医者代のために一食抜かなくてもいい人なのだろう。

芝居のせりふに「おまえは誰の陰でこれまで生きてこられた」という言葉を良く聞くがこのへいわで裕福すぎる今があるのは誰のお陰なのかって聞かえてきそう。

古稀祝いに 参加しましょう

最近無理が利かなくなってきたなと思うようになって来ました。それでも「古稀」って何処かのおじいさんの話のような気がします。認めているつもりなのですが、どうも自分のことだとピンと来ないのです。

どっちにしろ節目のイベントであることに間違いありません。気持ちと裏腹にあとがないかも知れないと思うと、やっぱりみなさんに会っておきたいそんな気分になります。

みなさん、9月と言ってももう直ぐです。それぞれ事情を抱えていると思いますが今から準備して一人でも多くのみなさんに会えますよう期待しています。

佐藤芳雄

編集手帳

どうやら私達もくるところまで来た感じ。今年の九月には「古稀祝いの会」が企画されました。先立たれた九名は仕方ありませんが、それでも五十四名決して多い数ではありません。出来ることなら全員の集合を期待したいものです。

昨秋からなやまされた雪もそろそろ消え始めました。春は必ず来るものです。しかしながら私達の暮らしに明日が来るのでしょうか。お役所の不正や怠慢。安ければいいと規制緩和の食料輸入。農薬混入は日本中を震撼させました。介護で食べ物で年金で土地や住宅で、ただ儲けようとする構造はその国をやせ細らせるだけではないでしょうか。「年取ったらのんびりと・・・」そうは問屋がおろさないのは解って居るけど少し先が暗すぎます。

こんな時だからこそ元気を出さなければ・・・みなさんまだまだ頑張り抜いてください。

「まどい」も今回で一九〇号になりました。どうやら二百号までは続きそうですのでよろしくお願ひします。